

基本情報 ■作者：燕石斎薄墨(?~1834) ■年代：文政8年(1825)

■寸法：縦17.1cm 横12.1cm



## 学芸研究員の目

往来物は子どもたちのための教科書であり、子どもの教育に不可欠でした。その内容は分かりやすいものが多く、往来物を著作した人物の工夫と努力がうかがえます。

学芸研究員  
安 保 智

この資料のココがすごい!!

目的地である塩竈神社までの旅が綴られ、旅をした人の動きが分かります!

お気に入りポイント

挿絵があり、子どもたちも挿絵を見てイメージを広げたでしょう!

## 塩竈神社参詣の旅を綴る 子ども向けの教科書

### 往来物とは?

『塩竈詣』は往来物<sup>\*1</sup>に分類される冊子である。現在でいえば、往来物は小学校の教科書であり、平安末期から明治初期まで使用された。往来とは書簡往来の意である。往来物の初期段階では、実際に使用された手紙を用いていたが、時代が下るにつれて語彙や慣用句を連ねただけのものが多くなり、江戸時代には寺子屋の教科書として用いられた。往来物の種類について、平安後期には現存最古の往来物で故事成語を多く用いた『明衡往来(めいこうおうらい)』など七種、中世には武士の交際・教養、日常生活に及ぶ基礎知識や用語を盛り込んだ『庭訓往来(ていきんおうらい)』など数十種、近世には数千種にのぼった。

編者は中世以前が貴族・僧、近世は文人・手習い師匠が多く、時代によって往来物の種類や編者の性格も異なっている。江戸時代において、往来物が数千種にのぼったことから、どの往来物を選んだらいいのか、悩んだ人がいたのかもしれない。

塩竈詣には地名や難しい文字には読み仮名がふつてある点から、子どもたち向けに読みの練習に使われていたと考えられる。往来物は明治初期以前の子どもの教育に影響を与えて大きな役割を果たし、重要な資料として高く評価されている。

作者の燕石斎薄墨燕(えんせきさいうすずみ)は水戸出身であったが、仙台に移り、『塩竈詣』だけでなく、『奥道中往来』、『平泉詣』などの数多くの著作を発表し、内容

がわかりやすいという民衆からの評判があった。

### 塩竈までの旅と足跡

『塩竈詣』には塩竈神社<sup>\*2</sup>へ参詣しようと旅立つ場面があり、旅立ちの雰囲気を出するため、川下りの挿絵や『伊勢物語』で在原業平が都から旅立つときに読んだ和歌が引用されている。

本文中には塩竈神社に至る道の途中で通過したとみられる、歌名所の「宮城野」や「木の下」といった現代にも残る地名、「壺石」や「沖の石」など多賀城の名勝地が登場する。古代、奥州みちのくは、歌枕を数多く抱える地として憧憬の対象となっており、都の公家や歌人たちの間で、教養として伝承されていった。江戸時代、俳人・画家・儒者などの文人が、松島や塩竈を一見するために来遊した。彼らは、古代以来和歌に詠みこまれた風景を実際に確かめ、奥州を旅した西行のような漂泊の歌人たちの人生を追体験するために塩竈神社などを巡見した。塩竈詣は子ども向けの教科書であるが、奥州に思いをはせて塩竈神社を参詣した人々の旅を凝縮し、彼らの歩んだ道のり、その足跡を伝えてくれる。

学芸研究員 安保 智  
実習生 木村 智

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 往来物  
\*2 塩竈神社